

2016年度 第1回スピリチュアルケア研究会 報告



左近豊牧師と会場内の様子

2016年度第1回スピリチュアルケア研究会が、2017年1月23日（月）に、聖学院新館（東京都北区駒込）2階集会室において、左近豊牧師（日本キリスト教団美竹教会、聖学院大学非常勤講師）を招き、12名の参加の中で開催された。左近牧師の講演題は、「聖書の祈りとスピリチュアルケア」であった。

左近牧師はまず、本年1月9日にNHKスペシャル東日本大震災「それでも生きようとした～原発事故から5年、福島からの報告」の中で取り上げられた佐藤善也さんを紹介した。佐藤さんは避難先の東京のアパートで、「相馬こいしや、なつかしや」と書き残して2015年に自ら命を絶ったかたである。この佐藤さんのような事例が少なくないことは、自殺のSMR値（標準化死亡値：100を超えると、その観察集団の自殺率が他と比べて高い）からも裏付けられるとし、その原因に＜曖昧な喪失＞があり、その＜曖昧な喪失＞とは、「津波で家が破壊された」という「明白な喪失」と対比するとき、見ているもの、景観は変わらないが、何を失っているのかが眼に見えてはわからない、し

かし、取り返しのつかない喪失に魂がうちのめされている、孤独感に襲われる、そのような世界に生きることを余儀なくされている状態を言い表すものである、と説明された。

では、そのような＜曖昧な喪失＞をかかえながら生き延びるためには、何がよりどころとなるのか、左近牧師の説く所は、「語り」であった。震災の記憶をそのままにしておけば、記憶は刃となって心を傷つける、しかし、語りを通して記憶に感情が伴い、記憶の断片がつながるとき、語り始めることが他の人にとってのサポート力となっていく、と。

もうひとつの手がかりが「祈り」である、と左近牧師は聖書を取り上げて説明した。聖書は、幾多の破滅と崩壊に向き合わされ、それに言葉と祈りを以て生き延びてきた民の証言書である、と性格付けたうえで、隠しきれない＜曖昧な喪失＞を抱えて生きる私たちにとっての聖書の意義を伝え、ことには、『哀歌』をひいて論じた。

『哀歌』の祈りには凄惨な響きがこだまする、とは喪失につぐ喪失を、そして生き延びたことへの嘆きを『哀歌』が伝えることを示す。その上で、左近牧師は『哀歌』の祈りの特質を2点において示す。その1点は、「心の奥底の、憎悪も怒りも苦しみも、感情を押し殺すことなく神に詰め寄る、そのようなどん底でこそ祈りの先に出会う神がおられることを証する」こと、もう1点は、「今の私たちの苦しみの体験を孤立化させない」ということ、この2点である、と。

『哀歌』においても3章20節を境に、逆境を経て新しい境地へと至る、と左近牧師は説明し、その移行の理由を次のように分析した。ひとつは、心理学的な変化の可能性、すなわち、ゆっくりと悲しみを言葉にすることで悲しみと向き合い、それと取り組む中で新しい方向へと向かわされるグリーンワークとしてのプロセス。もうひとつが、神学的な理由。嘆きの淵で、苦しみを共有する場

で神との出会いがあるということ。この、嘆きを一転させるような出会いとはどんなものか、それを左近牧師は、『哀歌』3章20節の「わが魂は絶えずこれを思って、わがうちにうなだれる」の原文は「わが魂」ではなく、「あなたの魂」であることを指摘する。すなわち、神の魂が私の上になだれる、そんなありがたいことがここに起き、神ご自身が私の上にかがみこみ、傷つき、泣くものと共に泣いておられる、そのわがうちにうなだれる神との出会いによってこそ救われる、これが左近牧師の講演の結論でもあった。

(文責：小野 久志 [おの・ひさし] 聖学院大学
大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後
期課程)